親しく正しく和かに
当山先々代三吉日照上人の提唱による
当山スローガンです
揮毫＝大本山本興寺御閑士大平日晋上人

季刊『寺楽寿』は東京都世田谷区北烏山の法華宗（本門流）
本覺山妙壽寺が発行する寺報です。
檀信徒の皆さまをはじめ、妙壽寺にご縁のある皆さまに
広くお読みいただければ幸いです。

寺楽寿 てらす

No.41

令和２年６月１日発行

本覺山　妙壽寺〈法華宗（本門流）〉
〒157-0061　東京都世田谷区北烏山５-15-1
電話 03-3308-1251　FAX.03-3308-7427
ホームページ　http://myojyuji.or.jp

リレーコラム No.1

連載「無縁社会と寺縁」は前号をもちまして終了しました。今号より当山弟子と職員による「リレーコラム」をお送りします。

悲しめる幸せ

「悲しめる幸せ」という言葉は、妻みあきが旅立ち一か月が過ぎようとしている時、ご法事で妙壽寺にお越しになられた、植田多恵子様（故植田新太郎妙壽寺ご総代の奥様）がお悔やみのお手紙を下さり、その中に記されておりました。

「亡くしてこんなにも続く哀しみ、悲しく想う気持ちを持つ程、素敵な人と出会い永い間、同じ時を重ねて来られたのは、幸せなことだったのではないか」とありました。

妻を亡くして心が揺さぶられた瞬間です。

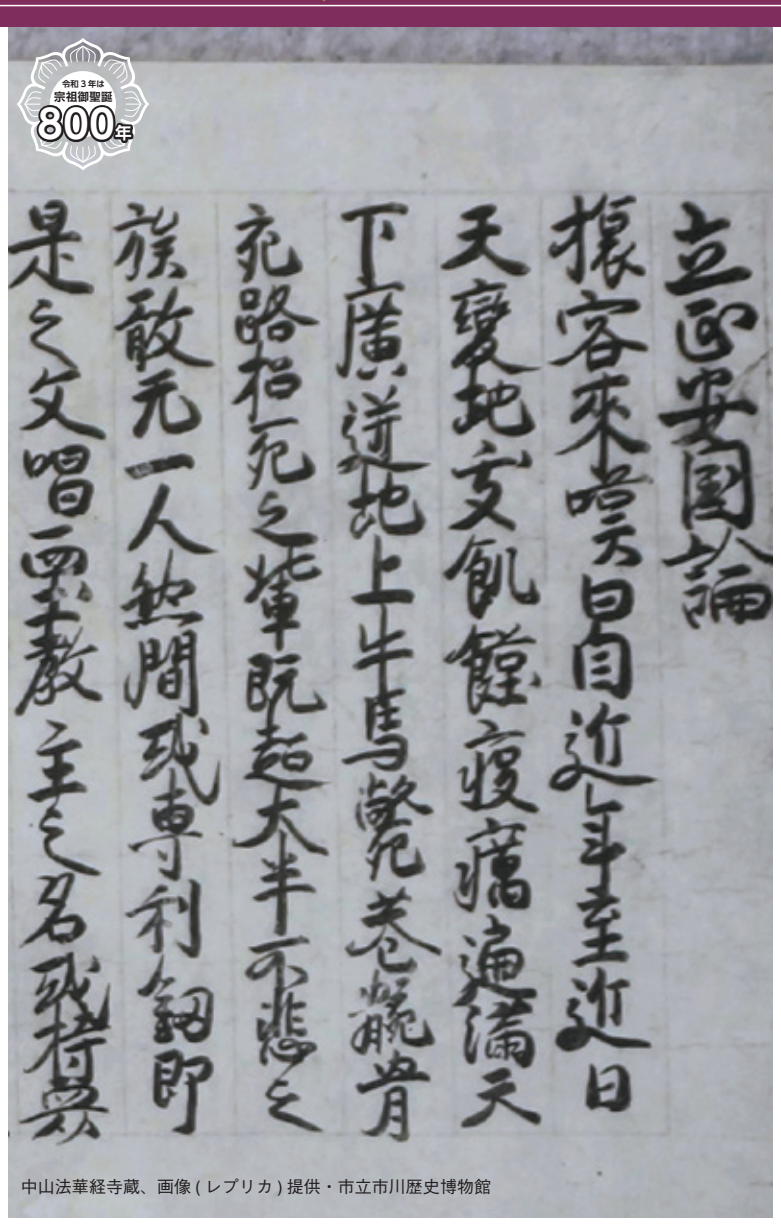
令和元年12月21日午後８時２分、妻は集中治療室で三日間黄泉の世界をさまよった挙句、静かに息を引き取りました。実の姉、姪っ子二人と私で最期を看取りました。その三日間は知り合って37年、結婚して33年の中でも一番長く一緒に過ごせた72時間でした。亡くなる数時間前に手首がピクリ、涙が一筋すーっと姪っ子が見逃しませんでした、意識のない中で最後の力を振り絞って私たちに何かを伝えたかったのだと思います。

早期退職したのは一年半前、二人でゆっくり過ごした時間は、大切な想い出であると共にこの日が来ることを見通していたのでしょう。

何年か前に「お墓に大事な人はいない」という歌がありました。私は僧侶でありますので、お寺の法務でお寺へ毎週参りますが、やはり妻はそこにもいると思えます。自分の心の中にももちろん一緒に居りますが、妻の両親とともに眠る妻を感じることが出来ます。そこに眠るのはご遺骨ですが確かな妻の証です。

短気な私に妻は「お坊さんは怒ってはダメですよ」とたしなめてくれたことを、59歳で旅立たねばならなかった想いを、これからはお檀家さまの悲しみの時、ご先祖を供養する際に少しでも心から寄り添える僧侶でありたいと思います。

（当山ご住職徒弟　園田顕敦）



中山法華経寺蔵、画像（レプリカ）提供・市立市川歴史博物館

今だから日蓮聖人

760年前の1260年（文応元年）、日蓮聖人は時の鎌倉幕府、執権北条時頼に対し「立正安国論」を諫言（かんげん）しました。正法である妙法蓮華経（法華経）を信じずに邪法（法華経以外）を信じることが続くと国内では内乱が起こり、外国からは侵略を受けて滅びると唱え、邪宗への布施を止め正法である法華経を中心（立正）とすれば国家も国民の安泰となる（安国）と説きました。

日蓮聖人の宗教の特徴は、「あの世」にあるのではなく、「この世」にあるのであり、個人の内面を追求してゆく宗教本来の在り方と同時に、その宗教のもつ理念を社会に向けて絶えずはたらきかけてゆくという点にあります。

現在においても蔓延する新型コロナウイルスは、人間の行為がウイルスの変異を発生させ世界的な大流行を起こしていると言えなくもありません。日本では緊急事態宣言が出されたにも関わらず、一部の方々は外出自粛に異を唱えて、自分勝手な行動に出ていることを皆さんも目にされていることでしょう。今は「利他」、他者のことをおもんばかって少しでもウイルスの拡散を防ぐ行動をとることが必要ではないでしょうか。

日蓮聖人はその自らの命を惜しまず、民のため、将来の私たちのためにお題目「南無妙法蓮華経」を残してくださいました。お釈迦さまがお唱えして日蓮聖人、そして我々がお唱えするお題目はいつの日か、皆が仏さまになる仏種です。日蓮聖人の生き方を真似することは私達にはとても出来そうもありません。しかしご家庭で祖父母、父母、子供や孫たちとこの経験したことのないパンデミック（爆弾のない戦争状態だと言えるかと思います）について自分たちが他者に対して何ができるのか、何をしなければならないのか考えてみませんか。

法要のご案内

（別紙参照）

盂蘭盆法要

7月16日（木）
午後２時

秋季彼岸会中日法要

9月22日（月・祝）
午前11時　　午後２時

宗祖第七三九遠御忌御会式

11月３日（火・祝）

猿江別院御写経会

次の日程で、すべて午後1時より午後7時まで開催。

第15回 6月 5日(金)　第17回 10月2日(金)
第16回 8月 7日(金)　第18回 12月4日(金)

参加費：500円（御写経御手本・半紙・美味しいもの）
＊御写経御手本・半紙・書道具筆ペンはご用意いたしております。

正隆会

【SHORYU-kai】
午後２時開催

月例講ご案内

当山では、毎月第２土曜日午後２時より月例講正隆会を開催しております。仏教や法華経についての勉強会や写経会、またウォーキング課外活動を行っています。檀信徒、ご友人どなたでも参加できます。例会では、毎回１時半より正隆廟墓前法要を奉修しております。

６月13日（土）	勉強会「日蓮紀行」拝読７
７月11日（土）	勉強会「日蓮紀行」拝読８
８月	休講
９月12日（土）	勉強会「日蓮紀行」拝読９
10月10日（土）	課外活動ウォーク
11月14日（土）	写経会
12月12日（土）	三千遍唱題会

写経のススメ

ステイホームを求められる中、このような時にこそ、皆様にご自宅で写経をしていただき、心安らかな祈りの時間をお過ごしください。

＊頒布品
「法華宗　写経法華経要文」
（法華宗教化センター発行）

セット内容：
写経手本各１枚　計３枚
薄墨練習用紙三種各１枚　計３枚、
清書用紙３枚　計３枚、
写経の心得１枚　計１枚、
下敷き１枚、10計
価格　●●円（送料含む）
ご購入は当山までお願いいたします。

当住上人宗門研究誌に寄稿

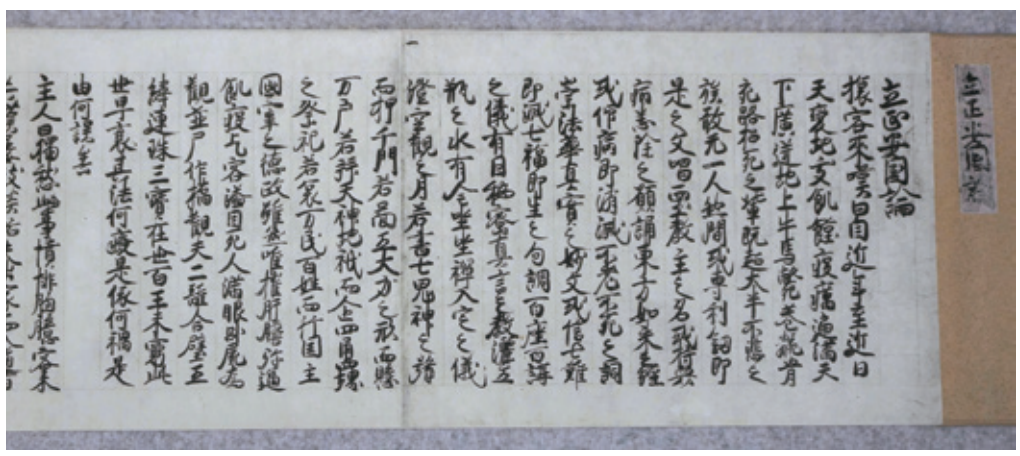
法華宗（本門流）教学研究所発行の学術誌「桂林学叢」に当山先々代日照上人所持であった江戸時代江戸組寺の戒律・規則を定めた「定」についての論攷を発表されました。

＊抜き刷りをご希望の方は当山へご連絡ください。

春彼岸報告

現下の状況におきましても春お彼岸にはお中日を中心に250余の方々に参拝をいただきました。中日法要にご参列いただいた方々には、マスクを配布させていただきました。

［お断り］諸行事中止により、「寺日記」はお休みいたします。



竹灯籠能　10年のあゆみ

回	開催日程	竹灯籠能　演目	落語　演目	
第１回	平成23年６月12日	鵜飼（うかい）	／	／
第２回	平成24年10月14日	葵上（あおいのうえ）	／	／
第３回	平成25年10月５日	経正（つねまさ）	鮑のし（あわびのし）	竹の水仙（たけのすいせん）
第４回	平成26年11月29日	半蔀（はじとみ）	時そば（ときそば）	妾馬（めかうま）
第５回	平成27年10月24日	猩々乱（しょうじょうみだれ）	鮑のし（あわびのし）	笠碁（かさご）
第６回	平成28年11月19日	菊慈童（きくじどう）	転失気（てんしき）	尻餅（しりもち）
第７回	平成29年９月９日	鉄輪（かなわ）		
第８回	平成30年11月24日	紅葉狩（もみじがり）	鈴ヶ森（すずがもり）	二番煎じ（にばんせんじ）
第９回	令和元年11月９日	羽衣（はごろも）	呑める（のめる）	天災（てんさい）
予告第10回	令和２年11月７日	石橋（しゃっきょう）	未定	未定

＊記念鼎談は、裏面に掲載しております。

鼎談 “竹灯籠能 10周年を迎える”

浅見慈一 師（能楽師）<写真左> × **三遊亭一之輔** 師匠（落語家）<同中央> × **三吉廣明** 上人（当山住職）<同右>

第9回目を迎えた令和元年11月9日、一之輔師匠が巧みな語り口で熱演し、その熱気が冷めやらぬまま三者鼎談が行われ、この10年を振り返りました。

令和元年11月9日　於・妙壽寺本堂　［敬称略］

三吉　皆さん、どうぞよろしくお願いします。まず、一之輔師匠、一つ目の演目は「呑める」、二つ目のお題は何とおっしゃいますか。

一之輔　二つ目は「天災」です。

三吉　これを聴いて、私、びっくりしました。なぜかというと、皆さんご存じの方もいらっしゃると思いますが、「心学」、心の学です。中学・高校の教科書には、丹波聖人こと石田梅岩は江戸時代に商家を中心にして心の学、倫理学を広めたということですが、それは関西で、その心学を江戸で広めたのが江戸後期の心学者、中沢道二で、お墓がこのお寺にあります。

一之輔　それは、知らなかったです。

三吉　妙壽寺の歴史を紐解いて、心学をお題にしたということでは決してないわけですね。

一之輔　知らないです。たまたまです。「中沢道二」という落語もありますよ。

三吉　ああ、そうですか！

一之輔　もう、噺をやる人はいないですが、僕もタイトルしか知らないですけど、「中沢道二」という落語はちゃんとあります。

三吉　実は数年前まで心学参前舎の方々のお参りがありましたが、今は、活動は休止状態のようです。足立区保木間に参前舎がありまして、それでよくお参りにお命日のときに見えていました。今日、私はその噺を伺って、師匠はお勉強をされてきたのかなと思いつつ、鳥肌が立ったような気がしました。

一之輔　勉強していません。

三吉　（会場に向かって）そこに皆さんお座りでしょう。皆さんの真裏ですよ（本堂西側よりすぐ）。もうそこ（西側）から十メートルぐらいのところがお墓です。東京都の史跡になっています。ちょっと調べてみていただけるとありがたいと思いますが。

以前、師匠をお迎えしたとき、高座の前に健康診断のお話をしました。すぐそれが題材になって「転失気（てんしき）」はおならのことで、何かうまくまぜっ返されたちゃったのかなと思いました。

一之輔　「転失気」はお寺の話ですね。

三吉　そうですね。和尚さんが知ったかぶりをするような。私もかなり知ったかぶりをしていますが、これも言いたいことだったのです。（笑）

そもそもこの会の発足の発端は、私の家内が代々木能舞台の生まれでございまして、父は亡くなりましたが、その父がお能を奉納したいという思いがあり、実弟であります浅見慈一先生にお願いをして、このお寺でぜひお能を演っていただきたいというお話から始まっています。その前に一つ発端となったのは、浅見先生の代々木能舞台で、お茶（茶道）とお能と落語の会があるということで、先生が若干お茶のほうに関係をしていることがあって、それが発端でしたかね。

浅見　もともとは寄席文字の…。

一之輔　はい。橘右近さん。

浅見　一之輔師匠の紹介です。

一之輔　それで能舞台にいらしていただいたんですね。もう10年近く前で。

浅見　そのときの落語をうちの姉（注：当住上人久美夫人）が……。師匠がまだ真打ちになる前ですね。

一之輔　まだ二つ目です。

浅見　そのときにもう目をつけていました。

一之輔　ご住職の奥さん、つまり浅見先生のお姉さんは押しが強いから。「元気ですね。ぜひお寺でも」っておっしゃっていただいて、「それはもちろん喜んで」、っていう感じでね。でも、もう早いですね。9年のお付き合いですか。

浅見　来年が10周年ですね。

三吉　やはりテレビで観たりとかするのと違って、またホール落語とも違って、これだけ耳の裏を見ていただけるような、こんな近くで。

一之輔　真横は、まあないですね、お客さんが真横にいるということは。お能はありますでしょう。

浅見　そうですね。

一之輔　能舞台でやることがしょっちゅうあるんですよ、能楽堂でやることも。そうすると柱がね。今の新しい能楽堂は柱が取れるところが多いんです。

浅見　そうですね。銀座の新しい観世能楽堂（GINZA SIX 地階）も取れますね。

一之輔　落語を能楽堂でするときは、この案配が難しい。こう向けると、向こうのお客さまを完全にないがしろにしてしまうので、若干こう向けて、こう作るんですね。だから、ここに座ってやっていると、どっち向いてしゃべっているかよくわからなくなる、角度がね。でも、厳かな雰囲気もあるし、和のものを聴くにはいいですね。あと、橋掛かりを歩くというのは、噺家はなかなかないですから。出囃子が流れているときに、結構長いでしょう。あそこを歩くのはいい気持ちですよ。ただ、降りるときにウケなかったときは、あそこを歩くのは苦痛でしょう。長いんですよ。ウケたときはいいですけどね、悠々と降りられるんですけどね。

三吉　小走りで。（笑）

一之輔　そう、駆けだして。後ろから出ちゃおうかなって思う。（笑）

三吉　お仕事柄、東京以外、地方にお出ましのことが多々あると思いますが、その場合は、お寺さんとか神社さんもありますか。

一之輔　多いですね。ちっちゃな会は檀家さんだけとかもありますしね。お寺主催で、このように落語会をほんとにオープンにやっているところも結構ありますから。神社もありますし、お寺もあります。ついこの間も、秋田の浄土真宗のお坊さんの集まりで、30代から40代ぐらいの若い方たちが……。

三吉　お坊さんに話芸として聞いていただく、私どもの宗派もあったりしますが、研修のようなことですか。

一之輔　いや、そのお坊さんたちが集まって、自分たちも聞きたいよねって、近所の人たち、町の人にも聞いてもらおうっていう、そういう団体のような、お寺と落語を合わせて、「おてらくご」っていう。

三吉　なんか、お手軽な。（笑）

一之輔　お手軽に落語、結構盛んですね。

三吉　お寺さんとか神社さんでされる場合には、客殿でもありますが、このように本堂の場合に、後ろにご神体とか、ご本尊があったりしますが、何か後ろからの目線みたいなものは？

一之輔　そりゃ、ありますよ。だから、高座でするときは必ず最初に手を合わせてお邪魔しますと。

三吉　歌舞伎で、お岩さんをやるときにお参りするみたいな。

一之輔　ああ、そうですね。バチが当たるかもしれないですね。お寺はまだいいんです、教会が結構……。

三吉　キリスト教。あれはちょっとなかなかですね。（笑）

一之輔　教会も宗派によって違うんですね、後ろに。十字架だけの場合もあるし、十字架に人がいる場合もあるんです。人というか、あの方がいらっしゃるときは。だから、やりいいじゃないですか、お上人とか、仏様だと笑っていらっしゃったりとか。あちらは結構、苦悶の表情を浮かべていらっしゃるので、ちょっとドキドキしますね。ほんとにいいのかしら、笑っていて……。

三吉　なるほど。（笑）

歴史というか、私がぼんやり思うのは、お能というのは室町期で、室町時代に茶道ができたり華道ができたり、日本文化の黎明期が室町時代なのかなと感じます。お茶の先生がお能を習うと、お茶の畳の目がわかったり、足幅なりがあったりするのですが、落語はそういう点ではやはり江戸時代になるんでしょうね。

一之輔　そうですね。江戸でしょうね。

三吉　一番思うのは、仏教とどうしてもつなげたいわけではないですが、お能の場合には、私、代々木能舞台のレクチャーにお伺いしたときに、ある大学の先生が、お能というのは仏教のプロパガンダだと。つまりお能は仏教の題材なくしては考えられないというようなお話をちょっと聞いたのですが、実際に見られてその辺についてはいかが思われますか。

浅見　神道のところも勉強しますし、仏教のほうも必ず勉強しますし、もともと私は若いころから寺社仏閣を巡るのも好きなので。

三吉　真面目なんですね。

浅見　いや、全然。親に反抗ばかりしていましたから真面目ではないんですけども。仏像を見るのが大好きなので、そういうことをしていくうちに、いろんな仏像の名前が能の詞章の中に出てきますから、そういうのがわかるので楽しいです。

三吉　そう考えると、江戸時代になって町人文化、私ども法華というのは非常に町人さんなんかに浸透していくという宗派ですが、わいわいがやがやという感じで、手を上げて、太鼓をたたくようなところもありますし、ただ落語を考えたときに、どちらかというとプロパガンダというよりも、抵抗勢力というか反体制、ちょっといじってみたいみたいな感じがすごくしますね。

一之輔　そうですね。

三吉　でも、真面目は大事ですが、事の本当のところって、やっぱりいじられると周りはよくわかるみたいなことがあるのかなという気もするのですが、どうでしょうか。

一之輔　どうですかね。もともとお坊さんの説法から落語って始まった。いろいろ中国の説話とかそういうのを檀家さんの前とかでしゃべっていたのをおもしろおかしく膨らませて落語になっているという、そういう説もあったりしますから、もともとお寺から出たというのもあります。あと、だんだん世間に浸透していくにつれて、お侍であるとか、それに近いちょっと偉い人を揶揄するみたいな、それで笑うっていう、風刺まではいかないけど、そういう笑いが広がっていったんでしょうね。だから、「転失気」なんていうのは、知ったかぶりの和尚さんを笑うっていう、そういうふうにつながっていくんですかね。

でも、もともとお坊さんで噺家になったという人もいて、二代目林家正蔵という人がいますが、この人はもともと和尚さん、お坊さんで、落語家になっちゃった。「蒟蒻問答」っていうお寺を舞台にした落語があるんですけど、禅宗の。これも大分お坊さん自体を揶揄したような、何かヤクザみたいな者が即席坊主になって問答をやるという話なんですけど、これももともとお坊さんだった二代目の正蔵が作ってやっていたというから、そういうつながりというか、近いんでしょうね。もともと一人がしゃべって大勢が聞くというスタイルがお寺と同じですからね。

三吉　私どもお坊さんになったときには、お坊さんというのは、話すことと、書くことと、お経を読むこと。この3つが大事だということをいつも言われています。

一之輔　何かおしゃべりの訓練とかするんですか。

三吉　布教師とか、説教をするプログラムがあります。お坊さんの学校に行ったときにそういうのがございまして、もうちょっとこう、多分近現代だと思うんですけども弁論というのが残っていまして、お坊さん学校で。弁論大会があるんですよね。早稲田大学なんかは雄弁会というのがあって、そこから政治家の人たちが出たりするんですけど、そういうことと、あとはお説教することはあります。でも、お能のように式楽のようなことはないですね。でも、所作はあるかな。

一之輔　所作のお稽古が。

三吉　所作はあります。法式（ほっしき）という言い方をしますが、それはほんとに宗派によって、私どもの別の宗派さんの法要に参列すると分からないです。それはかなり宗派によって独自なものがありますし、そういう所作というのは逆にお能のほうから取り入れている部分も、そういうのもあるのかなというような気がします。

浅見　論議というのがありますね。

三吉　論議というのは、これは恐らく、最初は日本の平安期の、宗派としたら最初の天台宗と真言宗、天台宗の比叡山の中で法華論議とかいうことがあって、受け答えをする。論者が問いかけ、答者が答えというのがあって、それもまた一つのお坊さんの試験になることがあります。先ほど師匠からお話が出たのは、そういう起源とされた、節談説法という、高座説法、そこが多分そういう語りの最初だったのではと教わっております。でも、今、仏教は、鎌倉新仏教とか申しますが、鎌倉時代はやはり平安仏教です。その後に、室町時代、戦国時代から江戸時代に今の宗派仏教が定着するというようなことらしいですが、お能の場合も各お寺さんとか神社に出向いて、薪能とかの形でやられますか。

浅見　決まったところには、お呼ばれしたときに出向きます。

一之輔　古い神社とかには能舞台があるところが結構ありますね。

浅見　大概それは神楽殿だと思います。

一之輔　ああ、神楽殿ですか。

浅見　橋掛かりがないですね。

一之輔　そういうところでもやっているんですか。

浅見　やる人もいます。近くの千駄ヶ谷の鳩森神社でやられる方がいらっしゃいます。あれも橋掛かりがないので神楽殿だけですね。

三吉　ちょっと取りとめのない話で、全く3人で打ち合わせもしないで……。

一之輔　でも、思いつきでしゃべるのもいいですよ。

三吉　いや、ご無礼だと思うのですが。ただおかげさまで鍋島客殿が10年ほど前に世田谷区の文化財に指定され、区からもいろいろお力添えいただきました。最近、ここにおいでになる会場のファンの方が見学されたりしますが、基本は非公開です。そういう非公開の客殿を見ていただきながら、落語とお能を観ていただくというのは、このお寺もやはり開かれていく。普通の家は、玄関の門を閉ざしていますけど、お寺や神社は全部開放しているというのは、今風に言うと公益的な神社仏閣という話になるのですが、昔からやっていたことを私ども続けてやっているだけなので、そういう中でこういう催し物も、これからもぜひ続けていきたいと思っております。そのためにはお二人の先生方にもお力をいただいて、それから皆さん方にもぜひご参加をいただきたいと思っておりますので、どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

今日は、ご来会ありがとうございました。

春風亭一之輔（しゅんぷうてい・いちのすけ）

1978年生まれ、千葉県出身。2001年、日本大学芸術学部を卒業後、春風亭一朝に入門。2012年3月、21人抜きという異例の大抜擢で真打ちに昇格。ラジオ・TV番組やミュージックビデオへの出演など、落語家の枠を越えてさまざまなメディアで活躍する。受賞歴に、NHK新人演芸大賞（2010年）、文化庁芸能際新人賞（2010年）、国立演芸場花形演芸大賞（2012年、13年）などがある。

浅見慈一（あさみ・じいち）

1964年生まれ、東京都出身。観世流シテ方能楽師。父・浅見真高および、故・観世銕之丞に師事。3歳のとき、仕舞「老松」で初舞台。98年からは真高が主宰する代々木果迢会（よよぎかちょうかい）を補佐。東京唯一の屋敷内屋外舞台である代々木能舞台で定期的に公演やレクチャーを行う。海外公演や新作能、復曲能などにも意欲的に取り組んでいる。社団法人日本能楽協会会員。